
都市伝説少女

7zu7

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

都市伝説少女

【Nコード】

N4827I

【作者名】

7ZU7

【あらすじ】

都会と田舎の中間である、発展途上の町。

多くの謎が存在し暴くものは誰もいない。

そこにやってくる転校生。

転校生の引っ越し2日目の晩、メールとともに

イチジクが送られてくる。それは物語の始まりの果実だった。

第1巻「思想無花果」（前書き）

本作品は多々グロテスク、ミステリアスな文章が入っています。
話の内容が深いこともあり、理解しづらい部分もあるとは思いますが
ので
できるだけ心臓の弱い方はお控えください。

第1失「思想無花果」

夏も、もうすぐ終わりを迎える。

蝸のなく声が油蟬の鳴き声と混ざって、悲壮感を漂わせる9月の下旬。

なぜかこの魁魁町もつかいまちは他の地域と違って少しばかり

季節の分かれ目が遅いそうだ。

僕は1日前にこの町に引越してきた、神下卓かみしも すくろ。

訳ありで、この町に引越すこととなった。その訳というのは、家族喧嘩。

うちのお父さんは甲斐性ナシで、とうとうお母さんに呆れられたところだ。

そんな、日曜ドラマのような展開にも限らず、当のお父さんはのんびりといつもと変わらない様子で、少し苛立ちも覚えた。

そんなところで、前振りもここで終わりだ。

僕は明日のために、いろいろ準備をしなきゃならない。

僕が引越してきたのは土曜日。今は日曜日。

明日は当然学校だ。高校生の僕にとって学校なんて、社会行事の環境。

行っても行かなくても、何も変わらない。だが、行かなかったら出席日数も心配になるので、前の学校でも毎日行っていた。

それでも僕は相当頭の悪い部類に入るらしいので、いい学校になどは入れない。

その理由もあってか、都会と田舎の中間ぐらいの発展途上の町。

魁魁町の学校に自動的に転入することになる。

僕は大体の教科書を鞆に詰めると、一息ついて

PCの横にある、炭酸飲料を飲みほした。

そんなシュワシュワとした娯楽に浸っていると、デスクトップ上に

一通の手紙が届いた。マウスのポインタを走らせ、受信箱をクリックする。内容はこうだった。

『神下 卓様。』

このたびは、ご引越しおめでとうございます。

卓様宛に、お祝いの品をお送りしました。

どうぞ、ご家族の皆様でお食べください。

質素な文ですみませんでした。

では。

『魁町会長』

丁寧な文章で、とてもデジタルで書いたのかを疑ってしまっ程の敬語だった。しかしこの文には一つおかしな点があった。

“会長”まで書いたのに、名前が記されていない。

本当のところなら、文章の最後に名前を付けるか何かするだろう。でも、それは“魁町会長”としか書いてなかった。

大方、忘れてしまったのだろう。

文章からして老人のようだったし、人間ではありえることだ。

さっそく僕は自室を離れ1階へ向かう。

どうも、この家の構造は覚えづらい。自室は2階。居間も2階。なぜか、前の家とは違う点が多すぎて困惑する。

郵便物が届いてないか、ポストを確認しようとする。足元に何かあたる。小さな段ボールだった。でも、持ち上げてみるとしっかり重みがあり、それが果物だと匂いでわかった。

「へえ…こんな田舎離れしているところでもこういう交流はあるの

かあ…」

どこことなく新鮮さを感じながら、玄関をくぐり父さんと妹を呼んでくる。

「おーい！届きものがあるんだけどー！！」

すぐに父さんが、自分の部屋から出てくる。

眠そうな顔を浮かべ欠伸までしている。父親らしくない気だるさだった。

「なんだ卓か…あのなあ、父さんは仕事疲れしてて眠いんだから、もうちよつと穩便に起こしてくれよ…」

僕は盛大にため息をついた。

この父親を穩便に起こすことなど不可能なのだ。

この前、前の家では布団を蹴ちらして会社に行かせたのだ。

そんな奴を穩便になんて…考えるだけで無駄だ。

これ以上脳にしわを作っては、パンクする。

「…どう…したの…？お兄ちゃん…」

お父さんと違い、ちゃんとした対応をしてくれる妹の鈴菜すずな。

中学2年生の清楚な妹。自慢したくなるような顔立ちだ。

世間から見ればこれはシスコンなのだろうか？

否。これは立派な兄妹愛。兄としての愛情思想だ。

でも、僕がさつき言った「届きもの」の部分は記憶からはがれていった。

というより聞いてなかった、と言ったほうが正しい。

「なんか、この町の会長…さんかな？」

その人から祝いの果物をもらったよ。」

その言葉と同時に2人の家族の目が輝く。

「なんだと！なんでそれを先に言わなかったんだ卓！

父さんはこれでも腹ペコなんだぞ？」

さつきまでのげんなりとした様子はどこへ消えたのだろうか。

僕の右手の段ボールを凝視してくる。

僕がお父さんに、段ボールを差し出すと食らいつくように

奪い取り、中身を確認し始めた。父親としては惨めな姿を見るのは酷だが

鈴菜の恍惚としたうつとりとした表情を見たらそれも安らぐ。

「おっ、これは無花果じゃないか？」

「イ…チジク…？」

鈴菜の頭の上に？マークが浮かび上がる。

僕が前住んでいた町では無花果なんて、ほとんど食わないからだ。

鈴菜はその存在自体知らなかった様子で戸惑いの目を僕に向けてくる。

「イチジクっていうのは“無花果”って書くんだ。

花が無い果物って書いて無花果。

でも実際は、薄紅色の花が実に咲くんだけどね。」

「…へえ…お兄ちゃんって…物知りなんだね。」

しまった。妹の前にも関わらずつい饒舌になってしまった。

指でジェスチャーまでしちゃったし…さすがちょっと引かれるかもしれない。

「そんなことはおいといて、とつとと夕飯にしよう！」

もう、我慢できないよ。今日のおかずはなんだい、卓？」

僕を下僕か執事が勘違いしてるのか知らないが、言い方がムカついたので

今日の夕飯の父さんのおかずには、ワサビとからしを混ぜてやった。

無花果は甘く、なんともおいしかった。父さんに訊くと

この地域の名産なのだそうだ。無花果は確かに

秋に実がなるから、食べごろなんだろうけど

すごく熟していて実になりたてとは思えないほど

甘かった。

第1失「思想無花果」（後書き）

辞書でいろいろ果物の種類を調べた結果がこうでした。

第2巻「絆創立志」（前書き）

本作品は多々グロテスク、ミステリアスな文章が入っています。
話の内容が深いこともあり、理解しづらい部分もあるとは思いますが
ので
できるだけ心臓の弱い方はお控えください。

第2失「絆創立志」

「あゝ！うるさい！！」
さつきから気付いてはいたのだけれどあえて、気付かないふりをして寝過ごそうと思った計画が台無しだ。

僕は目覚まし時計が大嫌いで、子供のころから忌み嫌っている。
僕に何の罪があるというのか知らないが、否が応でもたたき起こす。それが目覚まし時計。

僕はいつものように目覚まし時計の電池を抜き、再び眠りにつこうとする。

だが、一度起きてしまったてはなかなか睡魔はやってこない。
僕は布団から出て、大きな欠伸を日の出とともにした。

なぜかは知らないが、この魍魎町は朝が早く住人の人たちは5時に出勤や

登校をしているのだ。全く僕には理解できない。
朝ぐらいゆっくり寝たいものじゃないだろうか？そんな疑問を胸に寝巻を脱いで制服に腕を通す。

新しい制服は昭和を感じさせるほどの年季が入っていた。

「…使い古しかな…？」
様々な疑問符を抱きながら、1階に小走りで降りていく。

もう鈴菜とお父さんは朝食を済ませたようで、テーブルの上に置手紙があった。

読んでみると、もう二人は家を出ていて僕一人で行きなさいという内容だった。

家族ながらに薄情者だ。鈴菜はともかく、お父さんは一生軽蔑して

やる。

僕はレンジで温められていた、トーストを口に押し込み牛乳で一気に流し込む。

こんなことをしていると鈴菜に注意されそうだが、急ぎなのでそんなことは関係ない。

転入初日ほど緊張するときはそうそうないのだ。そして、時間もないのだ。

僕は昨日用意した物を一通り確認すると、急いで家を飛び出した。

近くの隣人に「おはよう。見ない子ね？」などと、いわれるので軽い理由をつけて

相槌で返した。チラッと窓を見ると、後方から僕と同じに走ってくる女の子が見えた。

時計を見ながらスピードを緩めずに、突っ走ってくる少女。遅刻寸前なのだろうか

いやに焦っている。加速してくる彼女の足。僕は避けようとしたが、一瞬遅かったらしく

少女のぶつかるのと同時に前へ転倒した。

「うわっ…！」

「うっ…!!」

少女のほうは僕がクッションになったのか、軽い声を出してすぐに立ち上がった。

僕のほうとしてはいきなりの出来事に、体がついていけず

熱い衝撃が鼻と口に広がる。

「あたた…ちょ！きみ大丈夫!？」

大丈夫なわけがない。真正面コンクリートに転倒したのだ。

さっきから鉄分が顔から出ていくのがわかる。

僕は鼻と口をそつと押さえ、立ち上がり少女の全体を確認する。

目立った外傷はなかったようだ。それだけで心の緊張の糸が緩まる。

「大丈夫。それより僕は急ぐから…君も急いでたんじゃないの？」
鼻血を垂らしながらいう男のセリフじゃない。

少々後悔しながら彼女を見ると、それも聞いてない様子で服を焦った様子で漁っている。

「えとえと…ハンカチか絆創膏か何かないかな…
これでもない…ちがうちがう！う…」

半ベソをかきながら探しまわる。これじゃ僕が悪いみたいで

罪悪感が心を締める。野次馬が「何あの男子。女の子泣かすなんてサイテー」とまで言い始める。

免罪をくらった人の気持ちは多分こうだろう。だんだん、周りもざわつき

人盛りができていた。僕もこれじゃあ立場なんかないので、その場をすぐに走って逃げた。

もうすぐ多分チャイムが鳴ってしまふ。予令も過ぎれば僕もおしまいだ。

僕の運動神経を甘く見るなよ。何せ僕は運動会でいつもリレーに出ていたのだから。

昼休みのバトンパスも欠かさずに出ていた僕が、こんなところで屈するわけにはいかない。

息切れなものも忘れてひたすら走り続ける。途中、何人かの生徒と出くわした。

皆遅刻なのをわからないのか…？とりあえず校門前まで来た僕は息を整えおぼついた足取りで

下駄箱に靴を揃える。これでもう歩いて、大丈夫だろう。さっきの緊張感とはまた別の緊張感が

押し寄せてくる。

「今日は忙しいなあ…はあ…」

ため息を漏らした後にほっぺをたたく。少しは心に気合が入っただろう。

教室の前まで来ると一人の少女が立ちつくしていた。

まさか僕以外にも転入生がいたのか。そんな偶然あるはずがない。

僕が少女の顔をずっと見ていると

ちらりとこちらを見て、すぐに視線を逸らした。

なんなんだ？人見知りなのか？僕から視線を外した後は教室のドアだけを

見続けている。そんなに僕がつまらなそうな人間だからって、酷すぎはしないか…。

そんな事を思っていると、先生がドアを開き手招きをしたので入れということなのだろう。

まずい。急いでたせいで自己紹介も何も考えてない。

一方少女のほうは、凜とした態度で澄ましている。

「ハイ！じゃあ、二人とも自己紹介お願いしまーす！」

体育教師が何か知らないが元気な声で、僕達を促す。

レディファーストなんて言葉が世の中には存在するが、こういう場合は

僕のほうから先に言ったほうがいいだろう。生徒のみんなもわざわざと、待っている。

「え〜…と、僕の名前は神下卓。すぐるっていう字は卓球の卓の字です。

どうぞ、これから…よ、よろしく願います…」

最後はちよつとカミカミになってしまっただけど僕としては上出来だ。先生の拍手とともに皆も、歓迎の色を浮かべてくれる。

さて、次は彼女のほうだ。一体どんな自己紹介なのだろうか。

「私の名前は黒志木 齋。以上です。」

教室内は一瞬静かになった後、どよめきとともに拍手が上がる。

だが、それもよそよそしくて僕は好きじゃなかった。

彼女の何がいけなかったんだろう。ただ、言葉を選ぶのが下手だっただけじゃないか。

先生に指定された席に着いた後も、僕はその態度に疑いを持ったまままで

相変わらず澄ました様子の黒志木さん。

何か僕には不審物を感じた

o

第2失「絆創立志」（後書き）

ベタな展開を回避すべく頑張りました。

第3巻「陰琴唱歌」（前書き）

本作品は多々グロテスク、ミステリアスな文章が入っています。
話の内容が深いこともあり、理解しづらい部分もあるとは思いますが
ので
できるだけ心臓の弱い方はお控えください。

第3失「陰琴唱歌」

黒志木さんと僕は、先生に促されるまま所定の席に着いた。

窓際の席で紅葉の兆しも見え隠れする背景を背中に、隣は黒志木さん。

転入初日にこんなドキドキすることがあっただろうか。

僕は一人悦んでいると…

「…顔がニヤけてます。きちんとしてください、卓君。」

女の子に下の名前で呼ばれることなど小学校いかなかったことなので、余計に意識してしまう。

そんなことはお構いなしとばかりに、空に顔を向けため息をつく。先生が正すように教卓を手でたたき、静かに授業の日程を説明し始める。

それでも、生徒のざわめきが収まらずにチラチラ僕のほうを見たり、ひそひそ話し合っている声が聞こえてくる。どうか、悪口じゃないことを願って…。

風に乗って黒志木さんの髪が揺れる。甘酸っぱい香りが鼻に触る。

それは、昨日食べた無花果の香りにそっくりだった。でもこんな凛とした彼女が無花果なんてももの食べるはずがないとすぐに頭から打ち消した。

当の黒志木さんは泳いだ目でじつと虚空を見ていた。

それに魅入られたのか僕はずっと黒志木さんに目がいつていた。僕のほうを確認すると邪険にするわけでもなく、今度は僕のほうを見つめてくる。

慌てて先生の話の話を聞いているふりをして誤魔化した。いや。絶対に誤魔化されていないだろうが。

そんな感じで、朝の会は過ぎていった。

一時限目が終わると同時に、僕の席に暴徒（生徒）が押し寄せてくる。

当然僕は質問責め。「好きな食べ物は何？」「彼女とかいるの？」「前の学校はどうだった？」

僕の体は理不尽なことの一つしかないし、聖徳太子でもないのですべてを聞き入れることは不可能。

抵当に相槌を打っていると、黒志木さんの視線に気が付きみんなは僕の席が少し退く。

僕は？マークを出しながらスキを見て、廊下に出た。

朝家で、トイレに行つてなかつたので急に尿意がきてしまったのだ。我ながら情けないと思いつつながら、トイレの場所を探していると朝の“突進少女”と出くわした。

「あれえ？君は朝ぶつかつた…だれだっけ…？」

ぶつかつたことは思い出せるようだ。僕は少し、ほんのちよびつとだけ安堵の息を吐く。

「僕は転入生の神下卓つていうんだ、君は？」

「ん？私は木野又きのまたりん鈴。一年三組の活発少女！！」

自分でああいつてるんだから言葉通りだろう。

一年三組といえば隣の組じゃないか。今度一度行つてみよう。

「君つてもしかしなくても…転校生さんだね。」

ズイと僕のほうにつめ寄り、問いただしてくる。

「う、うん。さっきこの学校に転校したんだ。」

「そうなんだ。うちのクラスにくればよかつたのに…ま、仕方ないか。じゃこの魁高等学校を以後よろしく！じゃ、またね。」

風のように木野又さんは去つて行つてしまった。

「あ…トイレの場所聞くの忘れた…」

僕としたことが…迂闊という言葉がここまでぴったり当てはまるのは僕ぐらいだろうな。

尿意を抑えつつ、教室に足を運んだ。

四時限目が終わって、やっと解放。

この学校は五時限目からは講義だの何かで、いつも帰りが早くなるらしい。

僕は一通り帰りの用意を済ませると、追っ手（生徒）をくぐりぬけて黒志木さんを探した。お互い転入生同士仲良くしようと、お昼にでも誘うつもりなんだけど…なかなか見つからない。

もしかしてもう帰っちゃったとかはないよな？でもそれは十分あり得る。何せ、あまり他連中には好かれてないようだったから、嫌気をさして帰ったのかもしれない。

それにしても、黒志木さんをみんな避けているような気がする。距離を置いているというか、なんだろう…前から黒志木さんの素性を知っていて、それで近づかなようにも見えた。

同じ転校生がそういう扱いをされていると思うと僕の良心が痛む。だからお昼を誘うのだ。

教室、購買、下駄箱。いろんなところを探したが、結局学校内に黒志木さんの姿は見つからなかった。

帰ったら帰ったで、帰り道で会うかもしれない。僕は上履きと外履きと早々に履き替え、中庭から学校を出た。帰る生徒が僕のことをチラ見してくる。そんな風に見られては、誰でもいい気はしない。

僕は足のスピードを少し上げ、帰路を目指した。

これで黒志木さんに会わなかったら本末転倒なのだが…会うことに賭けよう。

しばらく歩くと、どこからか見知らぬ音色が聞こえてくる。

なんだったかな…この音は…そうだ、思い出した。確か「琴」っていう楽器だったと思う。

しかし、いくら探しても音源が見つからない。僕は探し物が下手なことを改めて知った。

僕は観念して家路をとぼとぼ歩いて行った。

歩道橋に差し掛かると朝と同じ衝撃が背中に走った。

「たつくん見つけ！」

後ろをとられ、羽交い絞めにされる。ぎりぎりと背骨が圧迫される。

「たつく…んって誰だ…」

ぼくの名前は卓、卓じゃない。

「だってえ卓君って言いにくいしね？」

羽交い絞めの腕がヘッドロックに代わる。

脳が今度は圧迫され、視界が薄れていく。

「ほら、だんだん気持ち良くなってくるから…」

「ああ…それって生命の危機じゃ…」

これで決定的だ。この子は木野又さんだ。

「き…木野又さんやめ…て」

「き…の…ま…た…さ…ん…!？」

圧迫が強くなる。何か僕は悪いことでも口走ったのか？否、断じて否！そんなことは一言も言っていないぞ！勘違いに違いない。

「鈴ちゃん〜」

と呼んでほしいのか…。僕の頭はもう割れそうだ。

「り…リンちゃん…ん…もう許し…て」

「よろしい！」

すつと腕の力が抜けて、僕に自由が取り戻される。

抱きついてきた鈴ちゃんの腕は黒志木さんと同じに、無花果の香りがした。

「てて…もう、いきなり…なんなんだ…？」

「えへへ…だって、たつくん黒志木さんのことばかり見てるからさ…」

「べ、別に変な感情で見てたわけじゃないよ…？ただ何となく…」
僕の口は変に軽いらしく、考えてもいない言葉をいいそうになって

口を閉じた。

「何となく…何？」

「それは…そういえば、みんな香水でもつけてるの？」

「ごまかすな！」

右手で少し小突かれる。愛らしい表現だなあ…。

「でも、香水って何のこと？そんなのみんなつけてないよ？」

「…え？でも今日、みんなから無花果の香りが

」

「…ッ！！」

鈴ちゃんが僕の体から飛び退く。悲痛な表情を浮かべながら。

僕の戸惑った顔を見ると、必死に作り笑顔をした。

「あ…なんかごめんね？気悪くしたカナ…？」

「いや…こつちこそ変なこと言っでごめん。」

意味もわからないまま僕は謝った。家庭事情とかには深くかかわらないほうがいいのだが、これは何か違うようだった。

「じゃ、じゃあ、私はこれでバイバイするね！明日も学校ちゃんと来るんだよ？今度はこの町をゆっくり案内してあげるからさ！」

笑いながら言う彼女はなにか必死だった。僕はそれを察してわざとと明るくふるまった。

「うん。じゃあ明日、案内よろしくね！」

「う、うん！まかせといて！ばいばい！！」

お昼だというのに、夕焼け雲を連想させてしまうような焦燥感。

なんだろうか、何かを隠して様な素振りだった。僕はこのもやもやを少しでも消すために近くの喫茶店に立ち寄った。

第3巻「陰琴唱歌」(後書き)

いちじくとざくろ…あなたどちらが好みですか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4827i/>

都市伝説少女

2010年10月21日22時35分発行